春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）

【Ｎコード】
Ｎ０４６７Ｔ

【作者名】
猫目石

【あらすじ】
奈落が滅して三年後、楓の住む里に春が巡ってきた。
つい先頃、かごめも村に戻っきた。
村は穏やかで優しい春の陽気に包まれている。
そんな春風駘蕩の日々。

ピ？？？チチチッ・・・
小鳥たちの囀（さえず）りが辺りに響く。
穏やかな陽射しが心地よい春のある日。
愛らしい声が、ワシを呼ぶ。

「楓さま、急いで！」

「そう、せかすな、りん」

「だって生まれちゃいますよ」

「亭主殿は留守か？」

「お仕事ですって」

「まあ、三人目ともなればな」

途中、骨喰いの井戸の側を通り過ぎた。
そうか、もう、あれから三年も経つか。
ワシの名は楓、この村を守る老いた巫女だ。

今から向かうのは臨月の珊瑚の処。
先程、産気づいたと村の者が知らせてくれたのだ。
奈落を滅して風穴の呪いが解けた法師殿は退治屋の珊瑚と夫婦(めおと)になった。
二人の間には、もう既に子供が二人いる。
双子の女の子だ。
二年前に生まれた。
だから今回のお産は三人目になる。
退治屋をしていた珊瑚は女としては大柄で体力もある。
前回は初産(ういざん)で、しかも双子だったから産道が開くのに時間がかかった。
二度目の今回は、もっと早いだろう。
家に駆けつけてみれば珊瑚が呻(うめ)いておった。
ムッ、やはり、かなり産道が開いておるな。
このまま産ませてしまおう。

「りん、急いで湯を沸かすのだ」

「はいっ！」

囲炉裏の熾(お)き火に、りんが息を吹きかけ火を熾(おこ)す。
干した枯れ葉を放り込めば忽(たちま)ちに火が赤々と燃え出す。
後は水の入った釜を掛け、時々、薪(まき)を足せば良い。
珊瑚は出産経験があるだけに、かなり落ち着いている。
だからだろう、双子の娘達も母親の心配をしながらも怖がってはおらん。
中には初めてのお産で余りの痛みに泣き喚いて暴れたりする者もお

るからな。
そうなると、まず、お産そのものよりも産婦を落ち着かせる方が先になる。
半時（＝約1時間）ほど経った頃だろうか。
赤子がスルリと産道をくぐり抜け顔を出した。
ワシが赤子を取り上げ、介添えはりんが務める。
ほぎゃっ・・ほぎゃっ・・ほんぎゃ～～～
大きな産声が上がる。

「よしっ、頑張ったな、珊瑚」

「元気な男の子だ」

「生まれましたか」

赤子を産湯（うぶゆ）に浸（つ）からせると同時に亭主の法師殿が仕事から戻ってきた。
後ろには大きな米俵（こめだわら）を三俵も軽々と担（かつ）いだ犬夜叉がおる。
相変わらずの馬鹿力だな。
村に住み着いた法師殿は犬夜叉と組んで妖怪退治を専門に請け負っておる。
それにしても随分と荒稼ぎをしてきたものだ。
これまでにも分限者からは『お札一枚で米一俵』などと法外な退治料をふんだくっておったが。
今回は、お札を三枚も使ったのか。
まあ、法師殿も今日からは三人の子持ちだ。

家族を養う為にも、しっかり稼いでもらわねばな。
りんがテキパキと産後の始末をしておる。
わしの手伝いを始めて、もう三年、手馴れたものだ。
そういえば、前回の珊瑚のお産の時もりんが介添えをしたのであったな。
殺生丸から、りんを託されて、まだ一年経つか経たないかの頃だった。
あの頃は、まだ慣れなくて、いささかおっかな吃驚(びっくり)の体(てい)であった、りん。
お産に立ち会うなど初めての経験であったろうからな。
その後、何度も村の女の出産に立会い今ではワシの助手を立派に務めるまでになった。
お産や月のもの、女に必要な知識が極(ごく)自然に身についたりん。
ンッ？・・・アア・・・そうか。
もしかすると、これも殺生丸がりんをワシに預けた理由の一つかも知れんな。
奈落を滅してから三日後、光の柱が立った。
光の柱が消え去った後、骨喰いの井戸が何事もなかったかのように元の場所に現われた。
そして、犬夜叉が骨喰いの井戸を通って戻ってきた。
だが、かごめは戻ってこなかった。
「かごめは無事だ」と告げるなり走り出し姿を消した犬夜叉。
犬夜叉が走り去った後、今度はまるで計ったかのように犬夜叉の兄の殺生丸が村に現われた。
りんとお供の小妖怪、あの矢鱈口煩(やたらうるさ)い邪見を連れてな。
正直な話、あの時は何をしに来たのかと思っておったな。
すると、あの大妖が徐(おもむろ)に口を開き、何と、ワシに、りんを預かれと申すではないか。
驚いたぞ、まさか、あの犬夜叉の兄が、そんな事をワシに頼もうとは思いもせんかったからな。

「人の仔は人の中で育たねばならぬ」

確かに、あのまま、あの大妖が幼いりんを連れ歩くことは感心せなんだ。
それもあって、りんを預かることを承諾したのであったが。
あれから、もう、三年が過ぎた。
当初、ワシは、もう、殺生丸は村に姿を見せないだろうと思っておったのだが・・・。
予想は完全に外れた。
姿を見せないどころではない。
あ奴は、殺生丸は、キッチリ、三日おきにりんに会いに村にやって来るのだ。
それは三年後の今も変わらん。
犬夜叉が三日に一度は骨喰いの井戸に入っておったのと良い勝負だな。
どうも、あの化け犬兄弟は根本的な処が似ておるようだ。
殺生丸は、いつも、何かしら土産(みやげ)を携えて村に来る。
ある時は食いものを、また、ある時は着物を、別な時は櫛だの、帯だの、果ては家具調度だのと。
それは、もう、実に多岐に亘(わた)る。
おかげでワシの家では貰(もら)い物を納めきれなくて、わざわざ裏に物置小屋を建てて収蔵せねばならん程だった。
どれもこれも、そんじょそこらではお目にかかれんような上等の品ばかりだ。
特に着物や帯には目を瞠(みは)るぞ。
こんな鄙(ひな)びた農村では、一生、目にすることも叶わないような色鮮やかな着物と帯の数々。

色もそうだが、手触りが、これまた素晴らしい。
最初は麻が多かったが、りんが成長するに従い絹物に変わってな。
何とも艶々（つやつや）とした美しい光沢を放つのだ。
これほどの質と量、大国の大名の姫君の嫁入り道具にさえ引けを取るまい。
イヤ、実際、りんは殺生丸に取って『姫』以外の何者でもないのだろうが。
ワシが、りんを引き取って間がない頃、いずれ、りんが大きくなったら誰ぞ良い相手を捜して嫁にと考えておった。
だが、こうまで熱烈な殺生丸のりんへの執着を見てしまっては是非もない。
この村に限らず近郷近在にりんの存在は知れ渡っておる。
巫女であるワシの“養い仔”或いは“狗神の姫”として。
りんは鄙（ひな）には稀（まれ）な器量良しの上に性格も良い。
当然、りんに目を付ける男は少なくない。
年々、美しくなるりんに惚れこむ男は老いも若きも増える一方だが。
如何せん、殺生丸が相手ではな。
諦めるしかなかろう。
端（はな）から勝負にならん。
あらゆる面において。
それでも、そう簡単には諦めきれんのが人の情というものなのだろう。
村の若い衆が遠巻きにチラチラとりんを眺めておるのを良く目にする。
近頃のりんは、めっきり娘らしくなったからな。。
そのせいだろうか、殺生丸が頻繁に村の周辺に出没するようになった。
あれは、明らかにりんに懸想する男どもに対する威嚇と牽制であろうな。
『りんに手を出すな！』という。

イヤハヤ、殺生丸も、内心、気が気ではないのだろうて。
ともかく、りんが成長した暁には必ずや殺生丸が迎えに来るだろう。
それは、最早、確定といってもいい事実だ。
だから、それまでは婆さまと孫として仲良く暮らしていこうと思っておる。
そうそう、大層、喜ばしい知らせがある。
三年ぶりにかごめが戻ってきたぞ。
犬夜叉を始めとして七宝や弥勒、珊瑚が、それはそれは喜んでな。
アア、勿論、ワシも嬉しいさ。
何せ、かごめは桔梗お姉さまの生まれ変わりだからな。
妹であるワシとも浅からぬ因縁がある。
奈落と四魂の玉が滅したのは、かごめがこの時代に来てくれたからこそ可能となった。
そして、これからは犬夜叉と共に此処(ここ)で暮らしてくれるのだ。
桔梗お姉さまが望んで叶わなかった願いをかごめが叶えてくれる。
こんな嬉しいことが他にあろうか。

「楓さま、殺生丸さまに着物を見せに行ってきます」

「ああ、りん、行っておいで」

先日、殺生丸が持ってきた新しい小袖を身に纏(まと)いりんが嬉しそうに駆けていく。
邪見が人頭杖を片手に慌ててりんの後を追う。
薄紅色の小袖、躍るような手毬文様が、愛らしいりんに良く似合う。
満開の桜の中、柔らかな春風が吹きすぎる。

「・・・春爛漫だな」

春の陽光に目を細め楓はソッと呟いた。
のどかで平和な村の風景。
戦国の世が終わったわけではない。
今も各地は戦乱に明け暮れている。
それでも、ここ数年、楓の村の周辺ではチョッとした小競り合い程度で戦(いくさ)はない。
天候にも恵まれ豊作が続き飢えに泣く者もいない。

（こんな日々が・・・少しでも長く続いて欲しいものだ）

楓は心の中でひとりごち薬草の仕分けを続けた。

了

（後書き）

：：【後書き】：：

そういえば、今日は四月八日、潅仏会（かんぶつえ）。
お釈迦様の誕生日、花祭りの日でした。
そういう日に、この作品を公開できるとは実に縁起が良いです。
これも巡り合わせでしょうか？
完結編アニメの最終回に刺激されて書き上げた作品です。
楽しんでいただければ幸いです。（●＾ｏ＾●）

◆◆猫目石　　２０１０．４．８．（木）

→　→　→

昨年のコメントです。
今年とは全く心境が違います。
大震災で痛手を受けた方々が一日も早く日常を取り戻せますように。
深い傷跡が少しづつでも癒やされますように。
そして、いつか被災した方々が笑える日が来ますように。
心から、それを願ってやみません。（祈）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0467t/

春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）

2011年7月9日04時53分発行